

第二卷

死すとも自由は死なず

明治十四年の政変、脱獄、加波山事件

斎藤成雄

近代文藝社

第二卷

死すとも自由は死なず

明治十四

脱獄、加波山事件

斎藤 成雄

著者略歴

出身地 栃木県那須郡南那須町大字東熊田2084
齋藤あ (著者実兄) T E L 0287-88-7851
現住所 神奈川県座間市入谷3-3485-1
本 名 齋藤成雄 T E L 0462-51-3517
既 刊 『ゆれうごく中学』近代文藝社
非行と現代中学教育問題を小説にまとめて描く。
第一巻『愛は死を超えて永遠に』近代文藝社
明治11年竹橋暴動事件の全貌を証すために描く。

死すとも自由は死なず

1986年10月20日 第1刷

著 者 齋藤 成雄 (さいとう・よしお)

発行者 福澤 英敏

発行所 近代文藝社

〒151東京都渋谷区代々木2-23-1-406

(03) 370-7839 郵便振替東京7-68875

定 価 1,500円

印刷所 日本図書刊行会印刷部

製本所 小泉製本所

1986 Printed in Japan

ISBN4-89607-939-6 C0095 ¥1,500 E

第二卷

死すとも自由は死なず

(明治十四年の政変、脱獄、加波山事件)

斎藤 成雄

目次

長野屋 おさのや に入る	7
松江の流刑	36
十四年の政変	64
脱獄	100
渡良瀬川に鉋毒が？	123
茨城の加波山へ	152

加波山に火が燃ゆ	193
三島通庸、栃木県令になる	215
激論	246
栃木県庁落成式の襲撃	251
加波山に蜂起する	280
美世子の帰郷	297
加波山事件の裁判闘争	322
あとがき	354

装幀 武井すみ江

第二卷

死すとも自由は死なず

——明治十四年の政変、脱獄、加波山事件——

おきのや
長野屋に入る

美世子は鶯の声で目覚めた。不思議と田舎の谷中村にいるような錯覚におちいった。冬の間は家の周辺のやぶの中で鶯はジョ、ジョと鳴いては、ひっそり寒さをさせて生きている。四、五月頃になると目白や四十雀などの仲間とは別に梅の木などに来てホーホケキョーと美声を張上げて友を呼ぶ、目白も山から山を渡り美声を山にひびかせて友を呼び子おびの準備にかかる春たてなわとなる。

明治十三年の早朝、美世子の枕元に市子は眠っている。広瀬喜一の忘れ形身の寝顔は、死刑になった生前の顔と似ている。二重瞼で面長、耳もわりと大きめで口のあたりもしまっている。やわらかな肌ですぎとおるような市子の寝姿はいくら見ても見あきることもない。広瀬の銃殺されたあとに残された美世子は市子を産んで新たな生命の誕生の前に死ぬこともできず。美世子のあらん限りの愛情をかけて市子を育てた。

生れた頃はただ夢中で笑顔をつくる可愛い赤ん坊でもしだいに力んで声の発声の練習のように顔を真っ赤にし「うー」とか「あー」と言うようになると数か月も流れ、一年もすぎると片言のお喋りをする。二年目にはやたらと駆けずりまわって手を焼いてしまう。この頃になると本当に可愛い女の子になった。

美世子は死刑囚の逆賊の妻となり、おめおめ田舎にも帰れなかった。両親や兄弟は肩身の狭い思

いをしなければならない、けれども本人が目の前に居なければ、そうそう目ざわりにもならなくすむだろう。そう思つて木柳キンの家に大屋やすこと宮崎直美の四人で同居することになって二年目にはいった。谷中村の山岡の美世子の実家からは米や野菜などが定期的に送られていた。

やすこは後家湯で働いていた。キンは竹橋暴動事件の後に西南の役で戦死した兵士の遺族には二十円の一時金がおりた。そのために士族の債券もありキンは生活に困らなかつた。美世子と直美は長野屋に届ける豪華な着物を縫っていた。

美世子の寝ている六畳の部屋にも一枚の着物で一軒の家が建つ程も高価なものばかり縫ひ上げたものや縫ひかけた着物が置いてある。きらびやかに着飾つた芸者たちと豪遊する政府高官の姿が思い出されるたびに五十五人も死刑になつたあわれな姿が二重にかさなり、広瀬の怨念はいかばかりかと思わないではいられない。広瀬は生前に言つた数々の言葉が頭に浮んでくる。

「政府高官は参議で八百円、陸軍卿を兼務すれば千五百円もの金を馬で運ばせる」それだけの月給だけで家は何軒も建ってしまうばかりか、いくら贅沢してもしきれまい。

いまは江戸時代よりも税金で苦しめられている。江戸時代の年貢は米で納めていたのでうら作物とか、小さな家内工業的な副収入は年貢とはならない。今より暮しよかつた。

今日では国税から地方税まですべてが農民の負担になり、すべからく金で納めるために米でもなんでもお金に替えて納める塗炭の苦しみである。矛盾していることをいちいち考えると悔やしさと、憤怒に燃えてくる。美世子もいまは二十歳の女盛りになる。鶯の声で目覚める若さが体内に醸成されているために怒りは青春を殺した者へと結晶してゆく。

やすこは後家湯で働いているために夜は遅く帰ってくる。そのために自然にやすこに時間をあわせ、四人の女達は竹橋暴動事件で死刑になつた、長島竹四郎、広瀬喜一、金井惣太郎、宮崎忠次。

そして五十五人もの人々を思い抱いて生きていた。美世子と市子は二階に寝ていたので目が覚めても下におりてゆくのは未だ早い。そんな時間には市子の寝顔を見ては様々な事を連想するのだった。それが唯一のたのしみでもあり、広瀬との熱い密月の結婚生活をまざまざと夢に描いてみるだけでも、そこには美世子のあふれる青春の数々は思い出となり堰を切ったようにどつとあふれて押し寄せてくる。

直美は美子の兄忠次の命を奪った政府高官を無性に憎くになると気持が制しきれないでいた。毎日、美世子と二人で長野屋へ届ける豪著な着物の数々は夢にさえ見ることのできない、華麗なものばかりである。芸者たちが着て酌をする相手は政府高官である。ときいてから一途に彼女なりに敵愾心に燃えると敵討を思い込むようになった。

長野屋は政府高官の秘密に集る場であれば芸者になりすまして中に入れば機会はある。希望のないいまの生活はやりきれない日々である反面、秘密を抱いて生きることとは命との接点で生きるようなもので明日の生命はなくとも生きる張合は出る。直美は敵討を心に抱くようになって二年になる。最初は夢の中でふと思っただけでも恐しくなり思い抱いたものを打消した。

単調な針仕事をしていると生きる支えが崩れなにかにすがりたい気持がしだいに大きくなる。一年もすぎると頃には夢が夢でなく現実になって長野屋に入りたいと思うようになった。

十三年の春になって直美は木柳キンに相談した。心の中に抱いた「暗殺」は言わなかった。とてもそんなことは口には恐しさのあまりでできなかった。しかし、利口な木柳キンは直美の心中を察していた。

美世子とやすこにキンは直美の「長野屋入り」をどうすべきかと相談をもちかけた。美世子は直

美の思込んだ気持を分かるように思った。と同時に広瀬の怨念もはらしてやりたい気持も急速に高まった。とはいえども言葉にはならないでしまった。

鶯の声を聞く頃になってみると美世子も直美と共に長野屋に入りたいと思うようになった。勇気を出してキンとやすこに話す気になった。その反面あやしげな雲も湧いてくる。

美世子は自分の心にふと疑念を抱いた。毎日しなやかでハデなすばらしい豪華な着物に接していると、いつかは着てみたくなる。心の隅にない筈はなく女は美しいものに憧れるのは必定にならざるをえない。美しい花模様の着物をきて舞う姿を想像しただけでも心は踊る。もしそんなやましい心があればゆくべきではなく、芸者は穢れたものである。

そうところに問うのだが、未熟な美世子には皆目わからなかった。それよりも直美の一寸なおもいこみようにひかれて動揺しないではいられない。果たして女に恐しい仇討のことを考えていいのだろうか。そんなことはあつてはならないもので女らしくつましく生きる。それが女の姿でもある。

小さな心の中に敵討が大きくなると、本当にできそうになることもある。だが実行した後の恐しさは何百倍にもなる。身の破滅になることも確実でもある。けれども今後、広瀬のためにできない生涯はなおいつそう窒息しそうに閉鎖された人生である。

恋の終点は「死」なのかもしれない。そう思うと生き永らいて淋しい人生をいつまでも無意味に生きるよりも短くとも敵愾心の水晶のようにきれいに美しく散る。その方が市子の将来にも母の生様になるかもしれない。あまりにも悲惨な最期となっても、人を愛することの厳しさは死をも覚悟して愛さなければならぬ。それが女としても人間の一個の精神の昇華ともなる。それが広瀬への美世子の短い生涯ともなつてゆくゆくは、市子が女になる時点で母の姿を教訓ともなれば本望でも

ある。

悩みぬいた美世子は、直美の真のころを聞こうと思った。その時、二人で留袖の朱色地に白や黄、青などの色はなやかな小島に浮んだ花模様、小島の舞う幻像の絵が豪著に描かれた着物を縫っていた。そのためにもし直美がこの着物をきた姿を想像してみると、やっぱり華やかな芸者姿に憧れているのではないか、なども考えた。

「直美さん。長野屋に入りたいというけど本心はなになの」

「忠次兄イちゃんの敵討をしたいの」と、いとも簡単に言った。

「果たしてできるかしら」

「できてもできなくとも兄から西南の役の戦争から帰還してもらった、敵を刺殺できる花かんざしを持っているの、それをお座敷にさして出たいのよ。そうすればいつかは機会がありそうなの」
美世子はあまりのことに仰天した。虫も殺せないようなあどけない直美である。真剣な表情から嘘ではないだけにいつそう恐しい感動をうけると、美世子の心もきまった。

その夜遅くなって四人揃った時に「直美さんと共に入りたいので頼む」と懇願した。

「それはダメよ、美世子さんまで犠牲になるべきではありません」と直美はきっぱり言った。

「そうよ、美世子さんは子供を生んでからは乳房も大きくなって女らしく、一段と美人になったわ。だから喜んで受入れてくれるかもしれないが、あなたは市子ちゃんという可愛いお子さんがいることを忘れないでよ。ただの身じゃなく母親なんですからものね」と、木柳キンは自分の子供のことのようと思うと留まるように夢中で説得した。

「そうだわ、直美さんだって私の言ったことを判ってくれたじゃない。四人はいつでも一諸に暮してゆきましよう、とも言ったじゃないの、万一にも問題起せば木柳キンさんにどれだけご迷惑かけ

るか分からないのよ。キンさんの好意を無視するやり方は反対よ」と、やすこも懸命の説得した。

「私は平気なのよ、もし直美さんが何事かしても、それは直美さんのおやりになることで私が指図することでもなんでもないし、私だって殺してやりたい気持だもの。それよりもその後に悲しい運命が待っていることの方が心配なんです」

「わたしは誰にも迷惑をかけずに、勿論。長野屋さんにも全く傷を負わない何等かの復讐を考えたのです。いや、それが出来るのかできないのか今は分からないけど、なんとかしないと気がすまないだけなのです。問題は市子と一緒に入れるかどうかで、市子がいる限りは子供を道連れにする不幸は避ける積りなのです。本当に勝手なことばかり言って申訳ありません」と、美世子は本当にそう思っている。復讐と一口に言っても女の身でなにができるか。そんな気持にまでなれるかどうかも分かるものでなく、ただ、そこには暗黒の世界があり泥沼に踏み込んでゆくことだけは現実の問題である。ただいえることは美世子は結婚生活をしてきた身だが、直美は生娘の筈であり果たして耐えられるものかどうか心配だが、それよりも可哀相なことも事実だ、それだけに直美の覚悟は強烈なものがあつた。

「それだけの覚悟でしたら、私。話してあげます。後悔はしないように覚悟をきめてくださいね。くれぐれも十分気をつけて動いてください」

木柳キンは直美と美世子の心が動かないものになるとあきらめてしまった。キンの心にも怨念があるの二人に陰ながらなくれとなく援助することになり、長野屋に行つて交渉した。

すると二人分の豪華な着物を借りてきた。直美のは緋袍で燃えるようなあざやかないろに扇面流し模様であしらわれている。朱色は若い直美の血気を催し扇子の絵に流れの綾模様は実に華麗な着物であつた。襦袢は単衣で半身のもので肌にすぎとおるようで白い肌を浮きたてるうす桃色だった。

帯はしぶ味のある落ち着いた色で華やかに着て締めあげると、十七歳の直美は嫁にゆくような晴姿に変身した。口紅をし高島田に結って、かんざしを刺した。

花かんざしはかつて宮崎忠次が西南の役である土族の家からもってきたもので、武士の妻が復讐に使う鋭利な刃先がついている。敵を刺殺のできるかんざしである。美世子は直美が本当に兄忠次の仇討のために使用した時のことを思うと美しいが恐しさを感じた。

「まあ、綺麗になったこと、直美さんとても素敵になったわよ」と、木柳キンは自分が見たてた着物が直美にびったし合ったので手を叩いて喜んだ。

「本当に似合うかしらね」と直美は鏡を見て不安な気持ちで着付けをしていたが笑顔がこぼれた。

「直美さん、そのまま嫁にゆくならいいけど、長野屋で芸者になって後悔しないかしらね」と、木柳キンは何回も念を押した。

「直美ちゃんをお願いします」と、美世子もキンに頼んだ。女ながらもこれから戦争である、敵陣に乗り込んでゆく覚悟がなければなるまい。

しかし、先に入っている島田真澄ことやなぎもいる筈だし、木柳キンがついて心配してゆくからには間違いはあるまい。

その夜遅くキンだけ帰ってきた。いくぶん酒の匂いがすると思ったら、長野屋の主人の酒の相手をしてきたという。直美はさっそく見習いの住込みになる。どうやら旨くことは運んだようであった。

「美世子さんのことも良く頼んできたわよ、後悔しているんじゃない」

「そんなことはないわ」

「そうかしら、相手させられるわよ。よほど気持をしっかりなさらないと、かえってあそこの空気

におぼれてしまうかもしれない。なにしろ華麗なしごとですものね」

「そうね、わたしもやなぎさんには驚いたものね」

「主人の酒の相手をして遅くなったのも、そのやなぎさんに事情を話しておかないと大変なことになるでしょう。それで遅くなったのよ、驚いていたわよ。でもあれだけの事件だからかなり知っていたわ、よかった」

「そう、それはよかったね、わたしを広瀬さんなんて言われたら大変なものね。あくまでも山岡美世子でなくっちゃ困るものね」

「それでね、美世子さんの前夫は西南の役で戦死したことになっているからね。呼吸を合わせないとバレルわよ」

「すみませんね、なにかもお世話になってしまつて、それでもいったん入るともう出られないわね。お別れね」

「淋しいね、でも私は市子ちゃんの顔見に行くわよ」

「そうしてくださると嬉しいわ」

その夜はやすこも来て三人で夜更けまで話し合つて別れを惜んだ。

諸外国に向け外人を接待するために日本人も短足で背伸びして洋装する。それはたて前は楽しい社交場でなければならぬし、そうかもしれないが保守的な人物は心底から楽しい雰囲気になれない。古河市兵衛などは三十年代までチョンマゲを結っていた。そこで木戸の指金で長州の豪商でもある黒木左衛門に造らせたというから、その黒木が主人なのであろう。純日本風の料亭でもあった。

木柳キンは黒木を知っているというからには、昨夜は共に呑んでいたように思われる。どんな男